

4 大川についての参加型ワークショップ集計表

【大川寄り合い】
大川の良いところ、思いで探し 集計表(平成24年6月26日)
(河口、下流部分)

場 所	年 代	備 考
大川の良いところ、思い出		
河口付近	S30年代	風景
下流	現代	風景
下流	現代	体験
下流	現代	風景
下流	現代	風景
下流	S30年代	体験
下流	S20年代	体験

(中流部分)

8 河口で集積した水害跡のとき、川の甲から見た川岸の風景がすばらしかった	現代	体験
9 子どもの頃、大川で泳いでいた	S40年代	体験
10 築造したボテイアオイの花の盛りが楽しかった	現代	風景
11 子どもの頃、川を堰きとめてカウリ(ごり)掘りをよくした	S40年代	体験
12 川の淵では水深2mぐらいいり、透明度も高かった。そこでぼてじゃこ(タナゴ等)釣りをよくした	S40年代	体験
13 自宅から遊歩をこえてきて、米粒をえさにして、よくトンコ釣りをした	S45年頃	体験

(上流部分)

14 小学生のころ台風が来ると、大川に架かる橋を形元の大人が引き上げていたのを見ていた。また、自宅が大川の近所だったので、消防の人が電話を借りて来ていたのを覚えている	S40年代	体験
15 うるり(ヨシノボリ)の群れが浮面プロットに張り付いており、合ザルを使ったら砂浜があり、川にも溜んだ水がたまりと流れていた	S45年頃	体験
16 砂法は地域の子ども達の遊び場であり、交流の場だった	S30年代	体験
17 昔の大川大橋のたもとには、小石や砂利の川原があり、ここで左義長をしていた	S30年代	体験
18 木造だった大川橋の橋板のすき間から、川が見えたのが楽しかった	S35年頃	体験
19 川が浅く、魚の群れが背びれを水面から出して川を琵琶湖に向かって上って行く様子をよく見た。当時の普段の川幅は3~4m位。砂の河原があった	S40年代	体験
20 水車廻りのとき、川底から吹き出したメタンガスの泡の多さに驚いた	現代	体験
21 10歳ぐらいの頃、家のおじいさんとモロコサ(カマ)を良くした	S35年頃	体験
22 90年代の頃、夜中に仲間6~8人でカーバイド(照明)を使って魚つかみえをよくしていた	S40年代	体験
23 つかみえのうなぎ捕り、ハスの手つかみ、段網での魚捕り等、家で食べる魚をよく捕まえた	S40年代	体験
24 小学校からの帰りに帽子いっほひの野いちごを摘み取り、お母さんと友達と一緒に家に持って帰ったことよく覚えている	S45年頃	体験
25 新川に架かっていた橋の上で時代劇の撮影があったことよく覚えている	不明	体験
26 10年ほど前、虫を捕って飼育していた。虫の季節を楽しみにしていた	H10年頃	風景
27 大川原川敷のワセノ道から望むマンカローブの原生林のような風景	現代	風景

(大川全域)

28 小学生の頃、大川でよく泳いでいた(60歳代)	S35年頃~S50年頃	体験
29 子どもの頃、大川でよく泳いでいた	S40年代	体験
30 野洲川の昔は田舎水車では、大川の河原で水車を動かした	S50年頃	風景
31 昔の大川には流れがあり、魚捕りができた	現代	風景
32 様々な魚がいた	現代	風景
33 大川の水面上に浮かぶかんざし(浮き)の長い風景が、地域住民が作業し、水車(ボテイアオイ、ヒシ等)刈りを実施しているのは懐かしい	現代	体験
34 「野洲川でんぐろのま」の中村先生の指導のもと、小学生も参加して実施した自然観察会が良かった	現代	体験



大川だより

第4号(平成24年11月10日発行)

発行：大川活用プロジェクト

(事務局 守山市湖岸振興検討会)

水質改善への新たな一歩～植生浄化にチャレンジ～ 美崎自治会長 伊藤潔

今年の夏、大川に小さな筏が数珠つなぎになって浮かびました。

この筏は、植物の成長を利用して大川の水質改善を図る目的で設置したものです。植物を活用しての水質浄化は以前から広く試みられていますが、その原理は、水中のリンや窒素といった栄養素を植物に取り込んで除去することでプランクトンの発生を抑えたり、植物に付着する細菌の分解力を利用して水質の改善を図ろうとするものです。

大川では初の試みとなった今年の実組では、1m四方の筏に浄化用の植物としてホテイアオイとクウシンサイ(空心菜)を植栽。ホテイアオイは繁殖力が強く水面一面に繁茂することから「青い悪魔」と呼ばれていますが、一方ではその繁殖力を活かして水質浄化に利用しようという試みもなされています。この場合、浄化の効果を生かすためには枯死する前に水中から除去することが重要です。このため大川では、筏の中で育成するとともに、9月末には除去することとしました。なお、ホテイアオイはこれまで大川に大量に繁茂していましたが、有志の皆さんの協力を得て除去に努めてきた結果、三年目の今年は自然状態では姿をみせなくなっています。

一方のクウシンサイは中華料理の素材として良く知られた植物。暑さに強く、水上で栽培すると大量に根を伸ばして水を吸収すること

から、近年、水質浄化に活用されることが多くなっています。一般的には最低気温が10度を下回ると茎も根も枯れ、自然繁殖による生態系への影響は発生しないとされていますが、腐敗による環境悪化もあり、美崎では10月末に除去しました。

植物浄化は、エネルギーを使わず、また低コストで水質浄化を図る手法として注目されています。自治会では今年の実組を検証しつつ、来年度の実施を検討するとともに、併せて生育したクウシンサイの活用法も議論したいと考えています。

大川は長年におたる水の停滞で水質が悪化しているばかりでなく、ヘドロの堆積も進んでいます。今年の実組はこれらの改善に向けてのささやかながらも新たな一歩になるものと考えています。皆様のご理解をお願いします。

なお、大川プロジェクトでは、こうした取り組みの成果発表を含め、今後の大川のあり方を議論する「第2回大川フォーラム」を1月に開催すべく準備を進めています。ご期待ください。



おわび「大川だより」の発行が大幅に遅れてしまいました

(守山市 未来政策課 木村)

夏ごろ発行予定の「大川だより第4号」の発行が大幅に遅延。▼この間、4月から毎月1回、大川の「未来予想図」を創るワークショップ「大川寄り合い」を開始。先進地への視察も実施。▼また、立命館「Sci-tech 部」による継続的な水質調査や水質浄化の実験、地域の方々による「植生筏」による水質浄化の実組等、様々な活動が大川を舞台に展開。▼とりわけ植生筏による実組は、非常に独創的なもので、本号でも伊藤自治会長が紹介されています。▼来年1月に計画している第2回大川フォーラムに向け、第5号もがんばって発行し、12月中には皆様へお届けしますので、よろしくお願いいたします。

大川の未来を考えるため、「河辺いきものの森」へ行ってきました

守山市 環境政策課 筈井

5月26日(土)、大川活用プロジェクトのメンバー20名で東近江市「河辺いきものの森」に視察研修に行ってきました。

東近江市にある愛知川河辺林は、かつて水害の防備や農用林(=里山河辺林)として大きな役割がありましたが、その多くが開発され、また管理放棄され、その姿を失いつつありました。

そこで、危機感を持った人々は平成10年6月にこの里山河辺林を保全することを目的に、「遊林会」を結成。活動を開始されました。以降、市と協働し、この地を人々が自然にふれ親しむ場、環境学習や体験学習の場、「河辺いきものの森」として、保全と再整備を進め、現在では年間約2万人の方がこの地を訪れるようになっていました。

森を流れる河川には、「せせらぎ」や池のようになった「小さなワンド」、更には「沼」のような状態の所と川幅や深さに変化をつけ、その環境にあった様々な水辺のいきものが生息できるよう工夫され、また、小さな子どもでも安全に川と触れ合える工夫がされていました。

また、昔のように継続的に人の手が入った里山河辺林として復活した15haの敷地内には自然観測路が巡り、一部では12mの高さからクヌギやアラカシの森を眺められる歩道橋「林冠トレイル」も配置されています。

「遊林会には性別や市内外を問わず、子どもからお年寄りまで、様々な方が参加されています。基本となる活動日は第2土曜日と第4水曜日の月2回。下草刈りから木の伐採、更には河川整備から炭づくりまで当日の作業計画から、参加者が自由にやることを決めて作業をしています。また、遅刻も早退も自由。お昼には参加者全員で手づくりの昼食を取ります。仲間と楽しみながら汗をかき、また、森の中で語り

合うこと、少しずつ森が蘇ることが実感できることが活動が長続きする『秘訣』だと思います。無理をしないことが重要です」とは当日、対応いただいたレンジャー丸橋裕一さんのお話。

また、この活動日以外にも会員手づくりの小屋で行われる「森の居酒屋」と名づけた作業内容を定めるミーティングや月2回の「木まま活動日」も。会員同士が本当に楽しそうに活動されていることが伝わってきました。

「河辺いきものの里」では、このほか子どもたちに向けた環境学習会や体験イベントとともにセミナーや音楽会も開催。ふるさとの豊かな自然を、未来の子どもたちにおくる

確実な取組が進められていました。



様々な自然環境や風景とともに農地や集落等、人々の営みの姿があります。また、地域の方々には子どもの頃の原風景としての「大川」が記憶されています。これらを取りまとめ、大川の未来を考え、将来のあるべき姿を「未来予想図」として取りまとめる作業を現在進めています。

しかしながら、この取組と同じように、「大川活用プロジェクト」を持続的な活動としてどのように発展させていくのか、そのことをしっかりと考える重要性に気づかされた有意義な視察研修でした。

大川だより

第5号(平成24年12月25日発行)

発行：大川活用プロジェクト

(事務局 守山市湖岸振興検討会)

大川・里川の持つ多機能

美崎自治会 戸田直弘

「絆・豊かな心・生きる力(知恵)」よく耳にする言葉です。私自身、まだまだ満足に持ち合わせているとは言い切れませんが、少なからずそれらを幼少の頃より「大川」から享受したと思っています。

子供たちは学校や家庭、地域で生活する中で、また「遊び」の中で養い培うことも大いにあると思います。決まった場所で決まった友達と決まった遊びをするよりも、より多くの人との交流や生き物と触れることで、更に育まれるものと思います。

大川環境学習会のお手伝いをさせて頂いていますが、漁業をしていることから、他の地域の子供たちにも漁業体験や水辺の学習会などで接する機会が数多くあります。しかしそれらの多くは、時間内に見せたいものを見せ、聞かせたいものを聞かせ、作らせたいものを作らせるといった、マニュアル通りに終始するものです。まばたきもせず、キラキラと輝く子供たちの目を見ることも少なくないのですが、しばしば体験や学習会はそこで時間切れ終わってしまいます。クワガタ一匹、小魚一尾をつかむ時にも、予測・想像・協力・工夫・創造…

あらゆる力が試され、同時に育まれると思うと、時間切れは残念で仕方ありません。



そうかと言って、目を輝かせていた子供たちが体験学習会の延長を自発的に行動するのをあまり目にしません。何故でしょうか？

与えられた時間とモノだけで、満足したのでしょうか？ いいえ、あの目の輝きは、もっと知りたい！もっと遊びたい！と私には見えません。ですが、昨年の大川環境学習会に参加した子供の発表(報告)で「僕たちは今の大川で水遊びや魚つかみをしたいとは思いません」とあったように、これが大川の現実です。

幼少の頃より大川から様々なものを享受した一住民として、今の子供たちにも生活環境の一部に位置付けられる大川に再生することが夢です。子供たちにとって、生き物がいる野や川での遊びは、案外スゴイ教育の場になり得ると思うのです。安全面での周辺環境を整えて、子供たちを放てる大川に。

「美崎寄り合い～地域と研究機関、学校、行政が車座になって話し合い」 (守山市 未来政策課 木村)

第4火曜日午後7時。美崎自治会館には大川活用プロジェクトのメンバーが三々五々集まってきました。▼話し合いのテーマは大川の将来について。自治会役員や教員、行政職員が熱い議論を交わしています。時にアルコールが入ることもありますが、本音でしゃべれる「大川寄り合い」からは、空心菜による水質浄化の取組や現在進めている未来予想図づくりなど、様々な成果が生まれています。▼行政職員となって25年。様々な場面で地域の方々と関わってきましたが、このような手法は初体験。これまでの行政として引いた立場から一歩踏み出し、まちづくりの一員として対等の立場で活動に参加させていただき、やる気と情熱がふつふつと湧きあがってきます。▼「美崎寄り合い」は本市が進める「市民参加と協働のまちづくり」での、地域と行政が同じ目標を共有するアプローチ手法としてモデルとなりうるものと自慢するのは、気負いすぎでしょうか……………

1月19日(土)に第2回目大川フォーラムを開催します。

守山市 未来政策課 高田

私たち大川プロジェクトでは、フォーラムの開催に向け、本年から自治会「大川委員」の方々、京都大学や立命館守山中学・高等学校、行政職員による頻繁な会議(私たちは「美崎寄り合い」と呼んでいます)を重ねています。

平成22年からスタートした水草除去の取組や、子どもたちに大川とその周辺環境に興味をもってもらおうと開催している環境学習会、外来魚駆除を目的とした魚釣り大会、大川をフィールドにした立命館 sci-Thec クラブによる生物相・水質調査、更に今年から取り組んだ「空心菜」等による植生浄化の試み等、メンバーによる様々な取組が展開されてきました。

かつてあれほど繁茂していた水草も下流部ではほとんど見られなくなり、またNHK等のマスコミに活動が取り上げられたことから、市役所のみならず、滋賀県や水資源機構等の公共機関、更には大川周辺の施設の方々からも大いに注目されるようになってきました。

現在、寄り合いでは取組を次のステップへ進めようと、これからの大川のあり方を取りまとめる「将来構想」を作成中。この将来構想では、大川とともになぎさ公園、琵琶湖岸を含めた区域を「オープンミュージアム」と位置づけ、環境保全と地域活性化を持続可能なかたちで実現することを大きなテーマとしています。

大川を再生し、その水辺環境と触れ合える場づくりを進めるとともに、琵琶湖や比良山系、更には菜の花畑を望む風景や集落の歴史といとなみ、大川や琵琶湖の植物や生物等、これら地域に潜在する資源に新たな魅力と価値を見出す取組、また、みさき公園を拠点としてこれら地域資源に触れる観察会や環境学習会の開催、更には閉鎖水域の水草繁茂に悩む地域への大川での解決方法の提示等、ここ大川から発信できることは多種多様に存在します。これらをまとめることで、私たちは「大川のオープンミュージアム化」が図れると考えています。

フォーラム当日には、これまでの活動報告や将来構想とともに、この構想を取りまとめたイラストを発表。パネラーの方々や会場の皆さんと意見交換をおこない、今後の具体的な構想づくりに生かしていきたいと考えています。

ぜひ皆様の参加をお願いします。



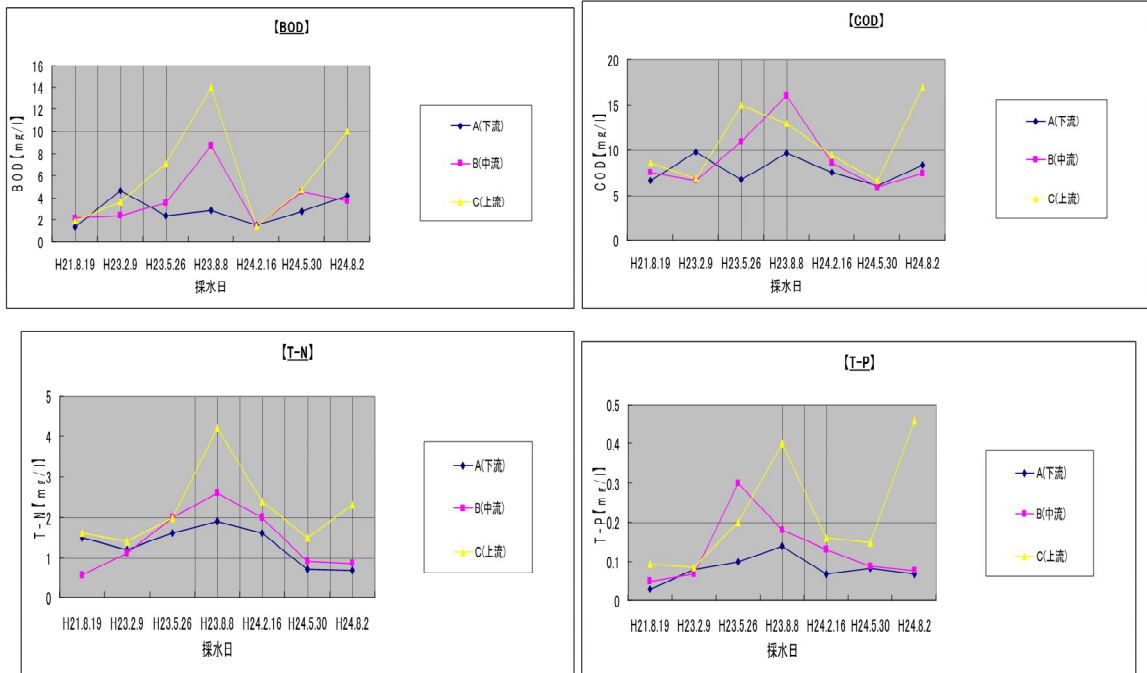
「第2回大川フォーラム ～これからの大川を語る～」開催のお知らせ

- 日時 1月19日(土)午後1時30分から4時頃まで
- 場所 美崎自治会館 定員 80人(先着順)
- 内容 プロジェクト活動報告、「将来構想」の発表、パネルディスカッション
(パネリスト、美崎自治会の方々、安藤和雄准教授、市長ほか)
- 連絡先 守山市未来政策課 TEL077(582)1162 メール miraiseisaku@city.moriyama.lg.jp
※ 詳細は、市広報(1月15日号)および市HP、チラシ等で後日発表します
- 同時開催 「写真と年表で訪ねる昔の大川と美崎展(19日、20日 美崎自治会館和室にて)」

6. 大川水質モニタリングデータ

○評価

- ・各採水地点での水質改善および悪化について、際立った経年変化は見られない。
- ・総じて、窒素・リンの指標がともに高く富栄養化が進んでいると推測できる。
- ・(別表1)の環境基準から判断すると、Dランク(最低位から2番目)に位置し、さらなる水質改善が必要である。
- ・上流(A地点)、中流(B地点)、下流(C地点)の順で水質改善の必要性が高い。
- ・BODに着目すると、汚染に強いコイ、フナ等が生息できる水質であり、実際に実施された魚の調査では、フナが発見されている。(【用語解説】参照)
- ・湖沼として見ると、CODの値が琵琶湖南湖3.2mg/lと比較しても著しく高く、他湖沼との比較では霞ヶ浦と同程度もしくはそれ以上である。



(基礎データ)	採水日																					
	H21.8.19	H23.2.9	H23.5.26	H23.8.8	H24.2.16	H24.5.30	H24.8.2	H21.8.19	H23.2.9	H23.5.26	H23.8.8	H24.2.16	H24.5.30	H24.8.2	H21.8.19	H23.2.9	H23.5.26	H23.8.8	H24.2.16	H24.5.30	H24.8.2	
	A(下流)							B(中流)							C(上流)							
採水時刻	-	15:16	10:24	16:43	10:18	10:01	10:52	10:45	15:08	10:12	16:35	10:07	9:54	10:40	10:25	14:59	10:05	16:43	9:56	9:45	10:15	10:05
天候	-	晴	晴	晴	-	-	晴	晴	晴	晴	晴	-	-	晴	晴	晴	晴	晴	-	-	晴	晴
気温 °C		32.0	9.0	19.4	33.0	4.3	20.5	34.0	32.0	9.0	19.5	33.8	4.3	20.5	33.0	32.0	8.0	19.5	33.5	4.2	20.5	35.0
試料温度 °C		28.5	6.0	18.5	31.5	4.5	22.4	32.0	28.5	6.3	19.0	31.0	4.5	22.2	30.8	30.5	6.5	18.5	29.8	6.5	20.5	28.7
1 pH	-	7.1	8.1	7	7.3	7.4	6.6	6.5	7	7.3	6.9	7.1	7.1	6.4	6.2	7	7.2	6.8	6.9	6.8	6.5	6.2
2 BOD mg/L		1.3	4.6	2.4	2.8	1.5	2.7	4.2	2.2	2.4	3.5	8.7	1.4	4.5	3.7	1.9	3.6	7.1	14	1.4	4.7	10
3 COD mg/L		6.6	9.8	6.7	9.6	7.5	6	8.4	7.5	6.6	11	16	8.6	5.9	7.4	8.6	6.8	15	13	9.4	6.6	17
4 SS mg/L		1.8	11	12	9.2	7	11	13	6	9.5	14	13	10	24	8.5	12	13	21	31	14	13	29
5 T-N mg/L		1.5	1.2	1.6	1.9	1.6	0.69	0.67	0.55	1.1	2	2.6	2	0.92	0.84	1.6	1.4	2	4.2	2.4	1.49	2.3
6 T-P mg/L		0.03	0.08	0.1	0.14	0.07	0.08	0.07	0.05	0.07	0.3	0.18	0.13	0.09	0.08	0.09	0.08	0.2	0.4	0.16	0.15	0.46
7 DO mg/L		2.2	13	3.7	4.7	10	7.5	6.4	4.8	8.8	3.6	5.6	8.5	5.9	4.2	3.8	7.2	4.4	4.3	6.5	4.8	6

(採水日)

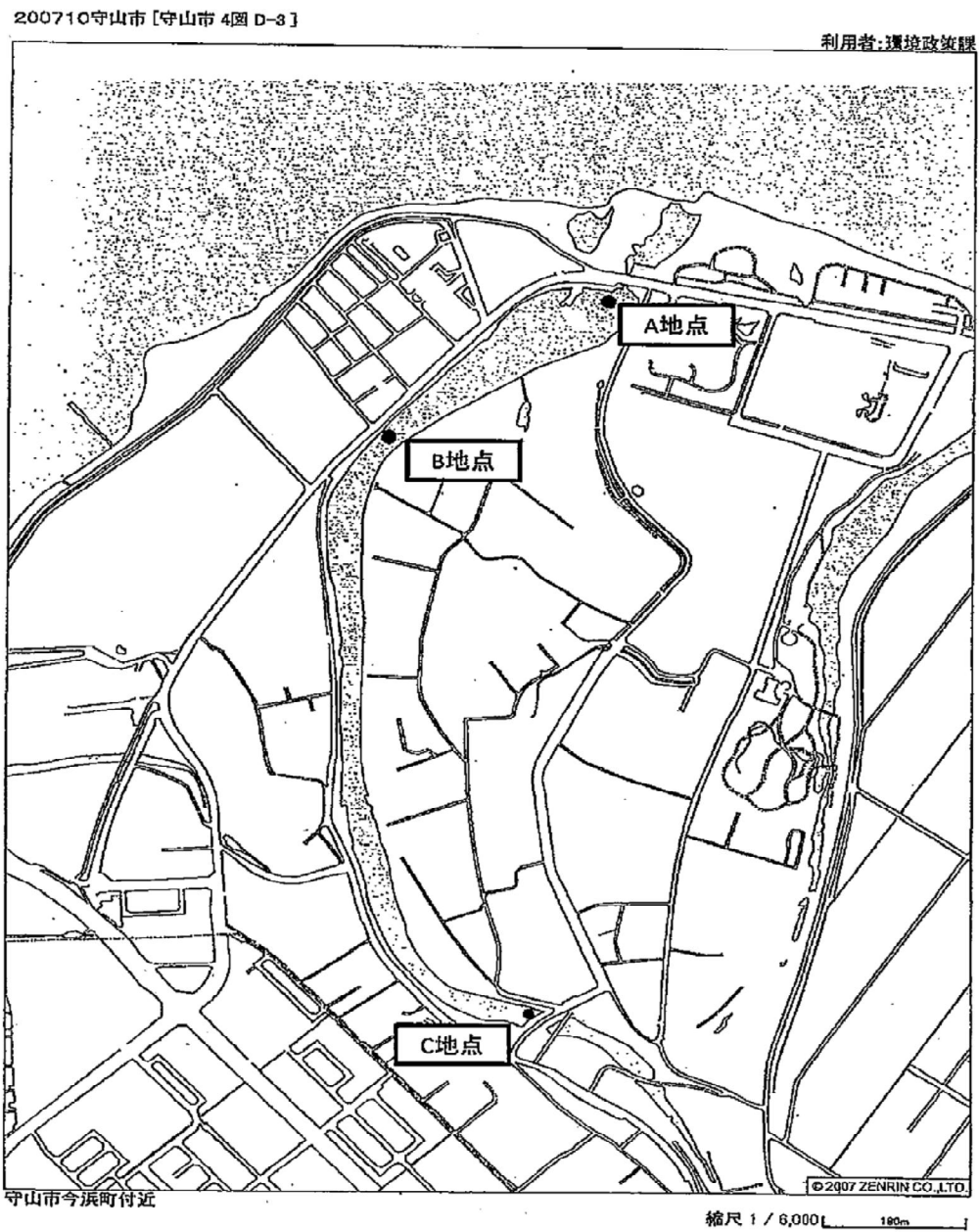
平成 21 年度 H21. 8. 19

平成 22 年度 H23. 2. 9

平成 23 年度 H23. 5. 26 H23. 8. 8 H24. 2. 16

平成 24 年度 H24. 5. 30 H24. 8. 2 H25. 2 (予定)

大川採水地点



(別表 1) 【【生活環境の保全に関する環境基準 (河川)】】

…環境庁公示「水質汚濁に係る環境基準について」より

項目 類型	利用目的の 適応性	基準値					(参考) 該当河川
		水素イオン 濃度 (pH)	生物化学的 酸素要求量 (BOD)	浮遊物質量 (SS)	溶存酸素量 (DO)	大腸菌群数	
AA	水道1級、自然環境保全 及びA以下の欄に掲げる もの	6.5以上 8.5以下	1mg/ℓ 以下	25mg/ℓ 以下	7.5mg/ℓ 以上	50MPN/ 100ml以下	四万十川
A	水道2級、水産1級、 水浴及びB以下の欄に掲 げるもの	6.5以上 8.5以下	2mg/ℓ 以下	25mg/ℓ 以下	7.5mg/ℓ 以上	1,000MPN/ 100ml以下	利根川 最上川 北上川
B	水道3級、水産2級及び C以下の欄に掲げるもの	6.5以上 8.5以下	3mg/ℓ 以下	25mg/ℓ 以下	5mg/ℓ 以上	5,000MPN/ 100ml以下	石狩川 多摩川
C	水産3級、工業用水1級 及びD以下の欄に掲げる もの	6.5以上 8.5以下	5mg/ℓ 以下	50mg/ℓ 以下	5mg/ℓ 以上	-	荒川 住吉川
D	工業用水2級、農業用水 及びEの欄に掲げるもの	6.0以上 8.5以下	8mg/ℓ 以下	100mg/ℓ 以下	2mg/ℓ 以上	-	寝屋川
E	工業用水3級、環境保全	6.0以上 8.5以下	10mg/ℓ 以下	ごみ等の浮 遊が認めら れないこと	2mg/ℓ 以上	-	

【用語説明】

自然環境保全 自然探勝等の環境保全

水道1級 ろ過等による簡易な浄水操作を行うもの

水道2級 沈殿ろ過等による通常の浄水操作を行うもの

水道3級 前処理等を伴う高度の浄水操作を行うもの

水産1級 ヤマメ、イワナ等貧腐水性水域の水産生物用並びに水産生物用並びに水産2級及び水産3級の水産生物用

水産2級 サケ科魚類及びアユ等貧腐水性水域の水産生物用及び水産3級の水産生物用

水産3級 コイ、フナ等、 β -中腐水生水域の水産生物用

工業用水1級 沈殿等による通常の浄水操作を行うもの

工業用水2級 薬品注入等による高度の浄水操作を行うもの

工業用水3級 特殊の浄水操作を行うもの

環境保全 国民の日常生活（沿岸の遊歩等を含む。）において不快感を生じない程度

水素イオン濃度 (pH)

水生生物に安全なpHは6.8~8.5とされており、pHが7のときに中性、7を超えるとアルカリ性、7未満では酸性を示す。

浮遊物質 (SS)

一般的に、数値が高いほど、水質の悪化を意味するとされており、水中に浮遊または懸濁している直径2mm以下の粒子状物質の量を示す。

数値が高いと、水が濁り外観が悪くなるほか、魚類のえらがつまって死んだり、水中植物へ光が届かず発育を妨げる。

溶存酸素 (DO)

一般的に、数値が低いほど、水質の悪化を意味するとされており、水中に溶けている酸素の量を示す。

数値が低いと、水の浄化作用を低下させ、水生生物が窒息死する。

一般的に、魚が生存するためには3mg/l以上が必要で、2mg/l以下では悪臭物質が発生するとされている。

生物化学的酸素要求量 (BOD)

一般的に、数値が高いほど、水質の悪化を意味するとされており、水中の有機物が微生物の働きによって分解されるときに消費される酸素の量を示す。

数値が高いと、溶存酸素 (DO) が欠乏しやすくなり、10mg/l以上で悪臭の発生等がみられる。

(参考) 水生生物の生息域 (出典: 公害防止の技術と法規編集委員会編、
公害防止の技術と法規 水質編)

BOD (mg/L)	魚水	底生生物	備考
<u>2.5 以下</u>	イワナ、ヤマメ アブラハヤ、カジカ	ヒラタカゲロウ類 カワゲラ類、ナガレ トビケラ類 ヘビトンボ、サワガ ニ プラナリア	
<u>2.5~5</u>	ウグイ、カマツカ タナゴ類、シマドジ ョウ ヨシノボリ	コカゲロウ類 コガタジマトビケ ラ ヒタラドロムシ、ハ バビロビル モノアラガイ、ヌマ エビ	
<u>5~10</u>	フナ類、コイ タモロコ、モツゴ オイカワ、ドジョウ	ミズムシ、シマイシ ビル ヒメタニシ	弱い硫化水素臭は ない
<u>10 以上</u>	普通はいない	イトミミズ、赤色ユ スリカ ホシチョウバエ、サ カマキガイ	ほとんどの場合、強 い硫化水素臭が認 められる。
さらに水が汚れると、目で見える生物はいなくなる。			

大腸菌群数

大腸菌及び大腸菌と性質が似ている細菌の数を示す。し尿汚染の指標として使われている。

全窒素 (T-N)

有機性窒素化合物および無機性窒素化合物に含有される窒素の総量を示し、数値が大きいほど汚濁していることを意味する。水系を富栄養化させ、赤潮の原因となるため、富栄養化の程度を表す指標の一つである。

全リン (T-P)

リン化合物全体の総量を示し、数値が大きいほど汚濁していることを意味する。水系を富栄養化させ、赤潮の原因となるため、上記の全窒素と同様、富栄養化の程度を表す指標の一つである。

大学との提携広がる

守山市と龍谷大学など

守山市と大学の提携・協力が広がりを見せている。7月7日には守山市と龍谷大学（京都市）が「健康なまちづくりプロジェクト」を柱とする協



大川周辺の自然観察会では、要注目の水生植物がライオンズ（右）も観察。地元住民のほか、ミズミズなど環境ボランティアの学生も参加した（7月23日、今法町＝野洲川で）。左の会：健康なまちづくりプロジェクト

立命館大、京都大は環境プロジェクトに参加

定書に調印。宮本和宏・守山市長は「互いに地域社会の発展、人材育成、学術の振興に結びつけた」。これに基づき、龍谷大

学はストックを手に歩く北欧生まれのスポーツ「ストックウォーキング」教室を7月から守山市で月に2回前後開催。社会学部コミュニケーション・マネジメント学の学生たちが本町自治会などと協力し



外来魚を釣る東南アジアの留学生ら（7月30日、今法町）

命館と「まちづくり全般」での連携・協力協定を、平成20年度には滋賀大学教育学部と守山市教委が教育に関する事業での連携・協力協定を、それぞれ締結。同21年度には京都大学生存基盤科学研究ユニットと地域研究での協力協定を結んでいる。立命館と京都大は協定に基づき、野洲川改修で取り残された形になっ

野洲川南流）の環境保全と活用を検討する「大川活用プロジェクト」のメンバーに。7月23日には京都大学の仲介でミヤンマー、ブータン、ラオスなど東南アジアの大学からの留学生らが「野洲川でんくの会」（中村一雄会長）が主催した大川周辺自然観察会に参加。東南アジアの大学関係者らは同30

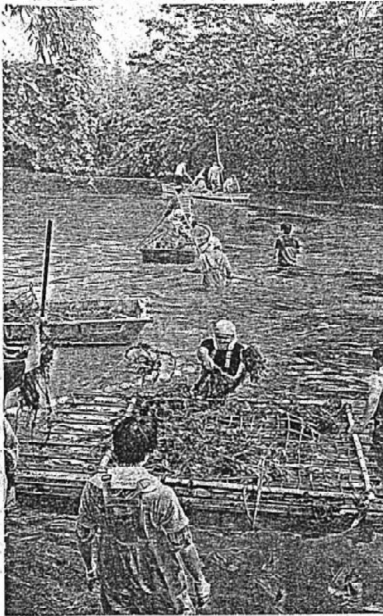


第1回ストックウォーキング教室に集まった人たち（7月16日、中山道＝守山市協働のまちづくり課提供）

日には美崎自治会（伊藤潔・自治会長）が旧美崎漁港で開いた第3回外来魚駆除釣り大会でブルギルなどを取り上げ、川辺の「まちづくり」の現状、人々の活動などを見た。

（守山市民新聞 2011年8月28日号）

大川で水草の除去作業をする住民たち。地元活性化に向けた取り組みが進められている(守山市今浜町)



野洲川改修 せき止め

大川再生住民・官・学探る

野洲川の改修工事に伴い、流れがせき止められている守山市今浜町の河川分流の「大川」で地元住民や市、京都大などが一体になり、活用法を探っている。市は今春、大川が地域の暮らし

守山

と関わってきたことを踏まえ、魚や植物の調査も行って基本方針となる「里川・里湖のまちづくり計画」を策定した。2013年度までに具体的な整備の全体構想をまとめる。(人見勲輔)

大川はもとと、野洲川が琵琶湖に流れ込む際に分流する川の二つ。野洲川は「近江太郎」とも呼ばれる暴れ川としても有名で、河口付近でオークのように枝分かれした流れは、たびたび洪水の原因にもなった。1970年代には大川の周辺で死者が出たこともあるという。洪水対策のため、1979年には大川の周辺で死者が出たことあるという。野洲川は現在の流れになった。

水草を肥料に 遊歩道整備 調査踏まえ具体化へ

その後約30年、大川への流れはせき止められ、琵琶湖岸から約1.5kmの流域を残すのみとなっている。近年では周りに木々が茂り、ホテイアオイやヒシなどの水草が大量発生している。

今月中旬、大川に地元住民ら約50人が集まった。目的は大川全体に繁茂していた水草の除去。強い日差しが照りつけるなか、住民たちはボートの伊藤潔会長(64)は「遊歩道を繰り出し次々と水草を回収。ヒシを中心にネットラック約3台分の水草を集めた。この水草は肥料にして使うことにしている。大川はかつて、流域住民たちが生活用水を確保したり、気軽に魚を捕まえる「おかしどり」の場にもなっていた。生活に密着した場だったことに地元の美崎自治会や市が着目。整備を通して再評価と地元活性化につなげようと、アジア一带の田園地帯をフィールドに持続可能な生活研究を行っている京大生存基盤科学研究ユニットに協力を要請、里川・里湖のまちづくり計画をまとめた。

写真を集めて展示会を企画したり、子どもたちに大川の未来を描いてもらう絵のコンクールの開催も予定で、「皆で具体的な将来像を見据えられるようにしたい」(みらい政策課)とする。計画では14年度から整備に着手する。



(京都新聞 2011年7月25日号)

よどみの中 除草に奮闘

旧野洲川跡地で守山の自治会



自治会は22日、町内の旧野洲川跡地をきれいにするため、旧河川の水草の除去や土手の草刈りなどを行った。地元で「大川」と呼ばれる同町内の旧野洲川南流は河口に近く、1979年の廃川後も土手や河溝が残る市の準用河川となったが、水がよどみ水草が繁茂している。2年前から

町内の旧河川に入り、スイレンを刈り取り船に引き揚げる住民ら。(守山市今浜町)

住民の手で水草の除去に取り組みしており、年3回、作業を実施。初年や翌年に繁殖していたホテイアオイやヒシは今年、ほとんど見られなくなった。この日は住民約60人が参加。うち土手人は水の中に入り、スイレンを根から抜いて船に積み込んでいた。土手では重機も使い、のり面に堆積した土や草を取り除いた。

(岩本敏朗)

(京都新聞 2012年7月23日号)

ヘドロで水質浄化「一石二鳥」

大川で水調査をする立命館守山高サイテック部の生徒(守山町立高)



守山市今浜町を流れる、野洲川の旧支流の大川の水質浄化に同市三宅町の立命館守山高サイテック部生物班の生徒たちが取り組んでいる。毎月、水質調査を行っているほか、ヘドロを原料にしたチップによる有機物の分解も計画。ヘドロの除去と浄化の「一石二鳥」を目指す。

立命館守山高の生物班

大川は、野洲川が琵琶湖に流れ込む際に分流し川の一つだったが、改修事で野洲川から大川への流れはせき止められ、現在は琵琶湖岸から約1.5kmの流域を残すのみとなっている。水流は滞りがちで、夏場に水草が繁茂しヘドロがたまる原因になっている。このため、地元住民が浄化に向け水草除去を繰り返

大川きれいに高校生奮闘

微生物使い有機物分解

住民の活動を知った同班の部員4人は、昨年夏から水質調査を開始。水温や富栄養化の指標となるアンモニアリン、溶存酸素の濃度などを調べている。また、昨年8月に静岡県で開かれた「高校生国際みずフォーラム」で、同県の高校が水を浄化するためのチップを川に投げる、微生物のすみかとするなどで有機物の分解したげる試みを紹介しているのを知り、同様の手法を大川でも活用することにした。

昨年の10月中旬に同川のヘドロを採取し、電気炉で直径1・5センチほどのチップに焼き固めた。今春に投入することを目標に、大川に運んだチップの大きさをチェックしている。同班の田中雄基代表(17)は、長岡京市には「琵琶湖に通じる大川の水質浄化は、近畿圏全体に関わる大きな仕事。ヘドロを生かせるように努力したい」と話している。(入見勲)

(京都新聞 2012年1月4日号)

「きれいな水辺へ」いかに夢のせて

美崎自治会：大川発守山ブランド!



植栽役の手入れと管理、クワシサイの収穫。河を流す自治会の皆さん。圃方は収穫されたクワシサイ

美崎自治会館に近い、大川の水上にたくさんのお見えし、乗っているのはホテイアオイやクワシサイなどの水生植物。そして、美崎自治会(伊藤潔自治会長)の「きれいな水辺へ」という大きな夢です。

これらの植物は、水質浄化に効果があると考えられる一方で、繁殖力のある外来種(ホテイアオイは国の要注外来生物に指定されている)です。このため、同自治会は植栽役で徹底した管理をしながら有効活用しようと考えています。

有効活用の方法として、前述の水質浄化はもちろんです。ホテイアオイは夏期に美しい花が観賞できます。クワシサイは、炒め物や中華料理の素材として、近年一般家庭の食卓に上るようになってきた野菜です。

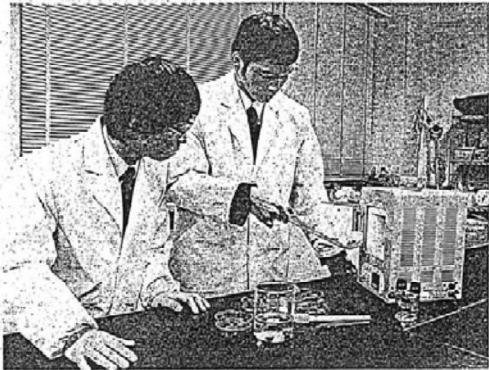
植栽役のお世話をしてきた自治会の人たちは「将来はこのクワシサイが守山ブランドや、大川ブランドになるかも」と目を輝かせていました。

(広報もりやま 2012年8月15日号)

滋賀県守山市の立命館守山高校「Sci-Tech (サイテック)」部の7人がよどんだ大川で毎月、水質調査をしている。かつては「おかず探りの場」と呼ばれるほど生活に密着した川で、住民の交流の場でもあった。調査で得たデータから大川を浄化する研究も進めている。
(草津通信部・猪飼なつみ)

川を調査浄化に挑む

滋賀・立命館守山高「サイテック部」



①電気炉でヘドロを焼き固め、水質浄化装置をつくる生徒。滋賀県守山市の立命館守山高校で
②大川でゴムボートに乗って水質を調査する生徒。同市の大川で

部員は八人でゴムボートに乗り込み、五地点で水質を調べている。測定するのは、水中の酸素量、濁り、汚れを示すリンや窒素の量など十項目だ。
琵琶湖に注ぐ大川は全長二・一。地元の人たちがおかず探りをするヒラメやアサギを捕まえていた。しかし、一九七九年に水流をもたらし、大川へ水が流れなくなり、水がよどみ、水草が繁殖するようになった。
大川が流れる美濃自治会の伊藤課長(五十)は「今は地域の人も大川に近寄らなくなっちゃった」と話す。「きれいなお川に戻し、若い人も大川を遊ばせたい」とも言うように願っている。

「ヘドロを砂に」検証

二〇一〇年から市職員と自治会の有志で水草を取り除く作業を始めた。
地域で研究の場を探していたサイテック部は、昨年四月から大川の水質調査に乗り出した。自治会、守山市、京都大とともに「大川活用プロジェクト」で、現状を把握すると同時に、水質を改善する方法を研究している。
その方法の一つが川底のヘドロの活用だ。直径二センチほどの塊にしたヘドロを乾燥させ、電気炉で焼き固める。焼くことでヘドロには無数の小さな穴ができる。これを川底に敷くと、穴にすみ寄った微生物がヘドロを分解、後には残るのはきれいな砂だけになる見込みだ。



この方法は、昨年八月に静岡県で開かれた水に関する研究を報告する「高校生国際サミット」で、他校の生徒が発案した「ライディア」を用いた、どの程度の水質浄化能力があるかを検証するため、川の水を学校に持ち帰り、焼き固めたヘドロを入れて水質の変化を測定している。

悲しむ住民に奮起

サイテック部副代表で二年の岩城基廣(三十)は「大川が変わって、地域の人は生活まで変わって悲しんでいる。水質を改善して、昔の姿に戻してほしい」と研究に取り組む。一年生の北原麻乃(十八)は「これまで地域の人が交流したことがなかった。大川も知らなかった。この研究で自治会の人への思いを知ることができて守山を身近に感じた」と語り、目を輝かせる。



真剣10代さびり場
須賀保洋行

(中日新聞 2012年1月23日号)



「どがな田園都市守山平和都市宣言」(昭和63年、守山市議会)一、理想を求め、守山のあちこちで豊かな自然・環境を守る取り組みが続いてきた。今年目を迎えた「大川活用プロジェクト」は、住民や漁業関係者、京都大学の研究者、立命館守山中学高校の生徒、守山市役所職員ら民・学・官が結集。去年8月に発足した「赤野井湾再生プロジェクト」は、益増殖する新種の外来植物オオバナミズキンバイの調査、悪除に市民グループが多数参加し、貴重な水と緑の恵み。守山市がめざす「住みやすさ日本一」に向けた実践でもある。(1～3面に守山の自然・環境特集)

大川活用プロジェクト

平成24年12月18日、美濃自治会館。美濃自治会(伊藤潔・自治会長)など「大川活用プロジェクト」にかかわる地元の人々や研究者、教育関係者、守山市役所職員らが集まった。公式の会議ではなく、人々が自発的に顔を合わせる「寄り合い」。平成25年1月19日(土)に予定される「大川フオーラム」のことなどを話し合った。

「大川活用プロジェクト」は平成23年度にスタート。大川の環境改善と市北部地域の活性化を大きなテーマに取り組んでいる。

平成23、24年度は大川の価値を再評価するとともに望ましい姿を議論する期間。伏流水はあるも

の流入する水が激減し、水は濁り水草が繁茂。一部は泥沼化してしまっただ。水質、景観、生物などほか、地域の中で大川が担ってきた役割が議論されてきた。

守山の「自然・環境」を守る

(守山市民新聞 2013年1月1日号)

「大川の今後のあり方」が話し合われている。プロジェクトは取り組むべき項目を「全体構想」として平成24年度中にまとめ、その後、平成25年度には全体構想具現化のための「仮称」大川環境整備計画の策定をめざしている。

「民・学・官」で川をキレイに
住民参加型の和

京都大学東南アジア研究所
実践型地域研究推進員
安藤和雄さん

野洲川南流跡地の大川。改修で放水路(本流)が出来て閉鎖水域となり、水質の悪化、水草の

繁茂などが地域社会の課題となつていきます。これを何とかしよう、「まちづくり」の方向を考えようというのが「大川活用プロジェクト」なんです。全国的に見て珍しい特徴が、住民、大学、高校、守山市役所など「民・学・官」が協力しているという点です。きれいな流れを取り戻そう、という願いは当然です。

私、これを「待ち」の仕組みと呼んでいますが。欧米の中央主導的な方法に対し、アジア的な住民参加型の手法、和を重んずるやり方だと思えます。

(続)

安藤和雄さん(京都大学東南アジア研究所 実践型地域研究推進員)

す。加えて、そこに至る道筋、方法に大いに気付けられました。

私はアジアの国々の農村開発を研究テーマにしており、現地では欧米発信型の開発が主流です。予算、事業期間などがきちんと定められた中で事業が進行します。ところが「大川活用プロジェクト」では、事を急ぎません。大勢の人々が、非公式の「寄り合い」を定期的に開き、意見交換します。それが公式の会議に反映されていきます。

(守山市民新聞 2013年1月1日号)

8 大川フオーラムアンケート集計表-1

No.	問1		問2					問3-1		問3-2		問3-3		問3-4		問4
	男	女	居住地	年齢	1	2	3	4	5	1	2	1	2	1	2	
1	○		美崎自治会以外	60歳代以上	○	○						○	○			
2	○		美崎自治会	60歳代以上	○	○						○	○			
3	○		美崎自治会以外	60歳代以上	○		○					○	○			
4	○		美崎自治会	60歳代以上	○							○	○			
5	○		美崎自治会以外	20~30歳代	○		○					○	○			
6	○			60歳代以上	○		○					○	○			
7	○			60歳代以上			○	○				○	○			
8	○			60歳代以上			○	○				○	○			
9	○		美崎自治会	60歳代以上	○	○						○	○			
10	○		美崎自治会	60歳代以上	○	○						○	○			
11	○		美崎自治会以外	10歳代以下			○					○	○			
12	○		美崎自治会以外	10歳代以下			○					○	○			
13	○		美崎自治会以外	60歳代以上	○		○					○	○			
14		○	美崎自治会	60歳代以上		○	○					○	○			
15		○	美崎自治会	60歳代以上		○	○					○	○			
16		○	美崎自治会以外	40~50歳代		○	○					○	○			
17		○	美崎自治会以外	40~50歳代	○							○	○			
18		○	美崎自治会以外	40~50歳代	○		○					○	○			
19	○		美崎自治会以外	40~50歳代	○		○					○	○			
20	○		美崎自治会以外	40~50歳代	○		○					○	○			
21	○		美崎自治会以外	10歳代以下	○		○					○	○			
22	○		美崎自治会以外	20~30歳代	○		○					○	○			
23	○			60歳代以上	○							○	○			
24	○		美崎自治会以外	40~50歳代	○		○					○	○			
25		○	美崎自治会以外	20~30歳代	○		○					○	○			
26		○	美崎自治会	40~50歳代	○		○					○	○			
27		○	美崎自治会	60歳代以上	○		○					○	○			
28		○	美崎自治会以外	20~30歳代	○		○					○	○			
29		○	美崎自治会	40~50歳代	○		○					○	○			
30	○			40~50歳代	○		○					○	○			
31	○		美崎自治会以外	60歳代以上								○	○			
32	○		美崎自治会以外	20~30歳代	○	○						○	○			
33	○		美崎自治会	60歳代以上	○	○						○	○			
34	○		美崎自治会	40~50歳代	○	○						○	○			
35	○		美崎自治会以外	40~50歳代	○	○						○	○			

Q07~8me/を2~3の琵琶湖並みにするにはどうしたらいいか?課題のよりに思う。

東近江市「河辺いきもの森」に美崎一般?として見学させて頂きたいです。

観光学習資源としての大川周辺の整備、オーブンスペース構想、わくわくする話として期待をもつ。里中の小さな小川にきれいな流水を呼び戻す。生活環境の潤いどう??

水質の改善はかなり大変で長期的な取り組みが必要ですが、ぜひ大川が人が楽しめる川となるよう頑張りたいです。

8 大川フォーラムアンケート集計表－2 結果一覧(総回答数35)

問1	性別	男	22
		女	13
	居住地	美崎自治会	11
		美崎自治会以外	19
		無記入者	5
	年齢	10歳代以下	3
		20～30歳代	5
		40～50歳代	10
60歳代以上		16	
無記入者		1	
問2	①	17	
	②	20	
	③	12	
	④	12	
	⑤	2	
	無記入者	1	
問3－1	①	34	
	②	0	
	無記入者	1	
問3－2	①	34	
	②	0	
	無記入者	1	
問3－3	①	33	
	②	1	
	無記入者	1	
問3－4	①	34	
	②	0	
	無記入者	1	
問4	記入者	4	

編集後記：地域にまなび世界に発信する大川活用プロジェクトの試み

大川活用プロジェクトの平成 24 年度の目標の一つが、大川の具体的な活用の姿をイメージとして共有することでした。そのために、月末の火曜日の 19:00~21:00 にボランティアで美崎自治会、市役所、立命館守山高校、京都大学東南アジア研究所のそれぞれの関係者が美崎自治会館に集まり月例の美崎寄合を行っていました。この美崎寄合が活動の一つの柱となって、参加型ワークショップにより、美崎寄合の参加者の思いの一つ一つを目に見える形とし、それらに基づいて議論することで、大川とその周辺の将来像が具体的な一枚の絵となりました。表紙がそれにあたります。そして、2013 年 1 月 19 日には平成 24 年度も集大成として第 2 回大川フォーラムを美崎自治会館で開催することができました。平成 24 年度も土曜日のお忙しいところ 80 名を越す人々が出席され、第 2 回大川フォーラムを無事終了することができました。大川活用プロジェクトがユニークであるのは、上記の関係者の相互の主体的協働関係が成立していることにあります。住民参加型開発が主要な開発アプローチとして脚光を浴びてきましたが、大川活用プロジェクトでは、関係者のプロジェクトのオーナーシップ意識が高く、相互啓発による主体的住民参加型開発が実践されていることにあります。また、立命館守山高等学校の生徒の発表スライドにありますように、私自身のアジアでの農村開発の経験から申し上げたいことは、大川活用プロジェクトの試みは、住民参加型農村開発のアプローチとしても「地域に学び世界に発信する」価値の高い内容となっていることです。私は今後とも関係者皆さんそれぞれが主体性をいかに発揮され、さらに一層のユニークな主体的住民参加型開発の一つのモデルとなって発展していくことを願っています。

平成 25 年度の計画と運営をよりよいものにしていくために、これまでの到達点としての活動を整理し、記録に残しておくことは大変重要であり、有意義です。その思いをこめて、平成 24 年度大川活用プロジェクト活動報告書を作成、出版いたします。本報告書のもとになった大川フォーラムでの発表者、原稿を寄せていただいた皆さんには大変感謝いたします。またこの報告書を手にとられた皆様、是非、大川活用プロジェクトに今後とも感心を抱いていただき、ご協力を賜りますよう、よろしくお願い致します。

(安藤和雄 2013 年 3 月 31 日)



写真：美崎自治会の子ども会代表の発表風景

大川活用プロジェクト平成 24 年度活動報告書

発行日 平成 25 年 3 月

発行 大川活用プロジェクト

滋賀県守山市今浜町 2761-35

電話：077-585-1019

メール：(守山市役所) miraiseisaku@city.moriyama.lg.jp

編集 安藤和雄

印刷所 アイNZ株式会社

電話：077-514-0562

ISBN 978-4-906332-18-2